

# 敦煌曲子詞訳注稿(三)

長谷部 剛

## 9. 005 天仙子(其一)

鶯語啼時(一)三月半。煙蘸柳條金線亂。五陵原上有仙娥、

攜詞扇。香爛漫。留住九華雲一片。

犀玉滿頭花滿面。負妾(二)一雙偷淚眼。淚珠若得似珍珠

(三)、拈不散。知何限。串向紅絲應百萬。

〔校勘〕

『敦煌歌辭総編』(総編)卷一 雜曲 雲謡集雜曲子

「雲謡集雜曲子」第二詞第一首 S1441Vを原卷とする。

(一) 鶯語啼時 総編は羅振玉『敦煌零拾』に従い、「燕語鶯啼」に改める。

(二) 妾 S1441Vでは「妾妾」と「妾」を二回書写するが、饒宗頤『敦煌曲』は「負妾之妾字、重寫。其一塗去」と述べる。

(三) 珍珠 『敦煌零拾』および王重民(輯)『敦煌曲子詞集』は

「眞珠」に作る。しかし、S1441Vは「珠珠」となっている。「珠」は「珍」に同じ。

〔韻字〕

半(去聲29換)・亂(去29換)・扇(去33線)・漫(去29換)・片(去32霰)・面(去33線)・眼(上26産)・散(去28翰)・限(上26産)・萬(去25願)

— 饒宗頤「敦煌曲韻譜」上去聲第七部(ただし、同書は「漫」〔眼〕を韻字に入れていない)。

〔解題〕

「天仙子」は『教坊記』「曲名」表に記載がある。また、唐・段安節『樂府雜録』龜茲部に「……太平樂曲・破陣樂曲、亦屬此部。秦王所制、舞人皆衣畫甲、執旗旆外、藩鎮春冬犒軍、亦舞此曲、兼馬車引入場、尤甚壯觀也。萬斯年曲、是朱崖李太尉進、此曲名

即天仙子是也。」とある。これによれば、曲子「天仙子」は「萬斯年」と同曲であり、李德裕（朱崖）が朝廷に寄進した曲であるという。

〔注〕 ○鷺語啼時 総編が改めた「鷺語鷺啼」は、孟郊「傷春」・王建「宮中調笑詞四首雜言」其二などの詩、および毛文錫「酒泉子」（『花間集』卷五）などの詞に用いられるなど、詩詞の常用表現であり、おそらく「雲謠集・天仙人」も「鷺語鷺啼」に作っていたと考えられ、「啼時」は誤写と考えられる。 ○五陵

「雲謠集」には「五陵」が五例見られる。ほかに、017・018「浣溪沙」（二首）、021「傾盃樂」・028「魚歌子」其二。このことなどから、総編は、「雲謠集」に「五陵」の語が用いられているのは懐古としてではなく同時代の表現としてである、と述べ（概略、「雲謠集」は盛唐期のものと断定している。○仙娥 仙女。女道士。ここでは、妓女を指す。○留住九華雲 『列子』湯問の「響遏行雲」を踏まえる。薛譚が秦青に歌を学んだ際、未だ学び終えていないのに学び尽くしたと思い、秦青のもとを去ろうとした。秦青はそれを止めず饒別の宴を張り、その際に歌を歌うと「響きは行く雲を遏（とど）め」た。○花 黃征（『敦煌歌辭總編』校釋商榷）（『敦煌研究』一九九〇年第二期）は「花子（花黃）」と解釈する。「花子」は「花鈿」ともいい、唐代、女性がひたいにつけた裝飾品。ひたいに直接彩色したり、金箔で作

った花形を張ったりした。○負 ①背く。②「覆」に同じ（黃征「『敦煌歌辭總編』校釋商榷」）。②で解釈すると「負妾一雙偷涙眼」は「髪飾りと花黄は、両目から流れ出る涙を覆い隠してくれる」と訳せる。○偷涙眼 人知れず涙を流す。「伍子胥變文」（『敦煌變文集』卷一）に「量久穩審不須驚、漸向樹間偷眼獻」。○涙珠 涙の粒を真珠にたとえる。「鮫人泣珠」（張華「博物志」卷二「異人」など）の故事を踏まえたものと考えられる。

## 〔通釈〕

燕が語り鷺が鳴く、この晩春三月のなかば。金色の糸のように乱れ広がる柳の枝はもやのなかに浸っている。五陵の草原には仙女がいて、歌扇を携えている。彼女の香りは紛紛として、（彼女の歌声は）乱れ咲く花のような、一片の雲を止まらせる。

頭には犀の角と宝玉で作った髪飾り、顔には花黄。（あのお方は）私を裏切って、私は両目とも人知れず涙を流す。涙の粒をもし真珠のようにできるならば、つまんでも散らばることはない。いったい涙はいつまで流れるのだろうか、涙の粒に穴を空け、赤い糸を通したならば、その粒は百万にもなるだろう。

## 10. 006 天仙子（其二）

又（一）

鷺語鷺啼（二）鷺教夢。羞見鷺臺雙舞鳳。天仙別後信難通、

無人問(三)、花滿洞。休把同心千遍弄。

007 巨耐不知何處去。正時(四) 花開誰是主。滿樓明月夜三更、無人語。淚如雨。便是思君腸斷處。

〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』(総編) 卷一 雜曲 雲謠集雜曲子

『雲謠集雜曲子』第二詞第二首 S1441Vを原卷とする。

(一) 又 S1441Vは「又」字がある。

(二) 驚語啼罵時 S1441Vは「驚語啼罵」と書写するが、総編・潘重規『敦煌雲謠集新書』・饒宗頤『敦煌曲』・『全唐五代詞』は「驚語罵啼」に改める。

(三) 問 任半塘『總編』は冒廣生「新觀雲謠集雜曲子」に従って「共」に改める。〔韻字〕参照。

(四) 時 S1441Vは「時」と書写するが、況周頤の『彊村叢書』本の校本では「是」に改める。潘思規『新書』は「規案…時、是字通、況校爲長」と述べ況校本に従う。饒宗頤『敦煌曲』も「是」とする。任半塘『總編』は「値」に改める。

〔韻字〕

006 夢〔去1送〕・鳳〔去1送〕・通〔上平1東〕・問〔去23問〕  
〔共〕〔去3宋〕・洞〔去1送〕、弄〔去1送〕

―饒宗頤「敦煌曲韻譜」上去聲第一部、第六部通用者(ただ

し、同書は「通」「洞」を韻字に入れていない)。「通」を韻字と見なすと、006は平仄通押になる。

007 去〔去9御〕・主〔上9麌〕・語〔上8語〕・雨〔上8語〕。

―饒宗頤「敦煌曲韻譜」上去聲第五部

このように、この一首は上関と下関とで押韻方法が異なる。そのため、総編はこの一首を二首とみなし、上関を「〇〇〇六」、下関を「〇〇〇七」とする。

〔注〕○驚教 驚いて眼を覚ます。この「教」は同音の「覺」として用いられている。○鸞臺雙舞鳳 高國藩『敦煌曲子詞欣賞』は、「鸞臺」が簫史・弄玉の「鳳臺」(『水經注・渭水』または「列仙傳」)であることを指摘する。なお、『山海經・大荒南經』に「爰有歌舞之鳥、鸞鳥自歌、鳳鳥自舞」とあり、これを典故として「鸞歌鳳舞」「鸞歌鳳吹」などの詩語が生まれた。『雲謠集』「天仙子」の「鸞臺雙舞鳳」は、簫史・弄玉の「鳳臺」の故事を用いつつ、詩語「鸞歌鳳舞」をも用いたものであろう。鮑照「代淮南王」(『玉臺新詠』卷九)に「紫房綵女弄明璫、鸞歌鳳舞斷君腸」。○天仙 総編は「思君」に改める。それは、下句「花滿洞」とあり、この表現が、劉晨・阮肇が天台で仙女と遭遇した故事(『幽明録』)を踏まえると考え、劉・阮が自分のことを「天仙」と称するはずがないから、この二字相当分は「天仙」ではなく「思君」に訂正すべきだと総編は主張する。た

だしこの説は過度に恣意的であり従うことはできない。○花蒲

洞 前注「天仙」で述べたように、総編は、『幽明録』にある、天台山の仙女が住む「洞」と見なすが、そもそも『幽明録』には「洞」の字はない。ここでは「花」は花箋、「洞」は洞房の意で解した。○同心 同心結のこと。ひもや帯の両端を固く結び、男女の愛情のかたい結びつきに喩えた。梁武帝蕭衍「有所思」(『玉臺新詠』卷七)に「腰間雙綺帶、夢爲同心結」。○巨耐 「巨奈」に同じ。〜に耐えられない。恨めしいのは、「不可耐」が「巨耐」になった。唐代の俗語。

## 〔通釈〕

燕が語り鶯が鳴き、その鳴き声で夢から覚める。鳳臺で鶯が歌い鳳が舞うなか簫史・弄玉が仲睦まじく簫を吹いているのを見るのがつらい。仙人と別れてのちは手紙も通わせがたく、消息を問う人もいないまま、花箋が洞房に満ちる。私は同心結を手で弄ぶのをやめてしまった。いままで千万回も弄んでいたのに。

恨めしいのは、あなたがどこに行ったかわからないこと。いまちようど花が盛んに咲いているのに、(あなたがいないままでは) いったい誰があるじなのか。夜三更のとき、明月は高樓をくまなく照らし、人の声も聞こえてこない。涙が雨のように流れるのは、あなたを思ってはらわたもちぎれんばかりの苦しい思いをしているから。

## 11. 008 竹枝子

羅幌 (一) 塵生 (□□□) (二) 幘幘 (三) 悄悄、笙簧 (四) 無緒理、恨小郎遊蕩經年。不施紅粉鏡臺前。只是焚香禱祝天。(幘幘悄悄□□□。□□□) (四) 垂珠淚滴。點點滴滴 (五) 成班。待伊來敬 (六) 共伊言。須改往 (六) 來段 (七) 却顛。

## 〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』(総編) 卷一 雜曲 雲謠集雜曲子  
「雲謠集雜曲子」第三詞第一首 S1441Vを原巻とする。

(一) 幌 S1441Vは「愧」と書写する。

(二) 「羅幌」句 總編「は其二の第一句「高卷朱簾垂玉牖」と合わせるために「羅幌塵生」の後に三字の脱落(□□□)があったと想定する。

(三) 幘幘 S1441Vは「幘幘」と書写する。

(四) 簧 S1441Vは「笙簧」と書写する。

(五) (六) S1441Vは「垂珠淚的成班」と書写し、その前に文字は無い。右の本文は総編に拠る。この部分を諸家は以下のように翻字する。

・垂珠淚滴羅裳裏 點點成斑。(「疆村遺書」龍榆生校本)

・幘幘悄悄垂珠淚、□□□□□、點點滴滴成斑。(「冒廣生」新

觀雲謠集雜曲子) ]

・□□□□□□□□□□□□□□垂珠淚、點點滴滴成斑(「蔣禮鴻」《敦

敦煌曲子詞集》校議

・垂珠淚滴，點々滴成斑。(潘重規『敦煌雲謠集新書』)

(六) 敬 総編は「際」に改める。〔注〕「敬」参照。

(七) 段 S141Vは「段」と書写する。『全唐五代詞』は「段」は「段」の俗字とする。〔注〕「段」参照。

〔韻字〕

年〔下平1先〕・前〔下平1先〕・天〔下平聲1先〕・班〔斑〕〔上平27刪〕・言〔上平22元〕・顛〔下平1先〕

—饒宗頤「敦煌曲韻譜」平聲第七部。

〔解題〕

「竹枝子」は『教坊記』「曲名」に載るが、その歌辞は敦煌の「雲謠集」にしか見られない。二首とも雜言体で、唐五代に流行した七言四句体の「竹枝詞」とは大いに異なる。

冒廣生「新觀雲謠集雜曲子」は、この「竹枝子」の声律(原文「声響」)からみて詞牌「虞美人」であると推測する。

〔注〕○羅幌 うすぎぬのとばり。○幘幘「幘幘」に同じ。たれ

ぎぬ。とばり。「幘幘」は「雲謠集」にしか見られない語。010「洞

仙歌」・024「拜新月」。○笙簧 笙の舌(リード)。○無緒理

とりとめがない。「無緒」と同義と思われる。この句を五言にす

るために「無緒理」としたのであろう。○恨 蔣禮鴻『敦煌

曲子詞集』校議は、「恨小郎遊蕩經年」が其二の第一句「高卷

朱簾垂玉牖」の「顔容二八小娘」と対応することから、この

「恨」字は襯字と見なす。○伊 伊 ①あなた。二人称代名詞。

②あの人。三人称代名詞。ここでは①をとる。○敬 任半塘

『總編』は、①羅常培『唐五代西北方音』p.38に「庚」「清」「青」

可以混入「齊」とあること、②王梵志詩(187)「飲酒妨生敬」に

ついて、「敬」と「計」が唐五代西北方言では同音であることか

ら「飲酒妨生計」に改めること、などから、「竹枝子」の「待伊

來敬共伊言」の「敬」は「際」に改めるべきだと言う。これに

対し、潘重規『新書』は「規案・斯一四四一原卷作「敬共伊言」。

「敬」者、敬謹鄭重之意、意極明白、臆改為即、似不可從。」と

述べる。○須改往來段却顛 総編は「往」を盛靜霞の校訂に従

って「狂」に改めるが、ここでは従わない。潘重規『新書』は

「段」を同音の「斷」とし「斷却」で一語をなすと解釈する。ま

た、潘はこの句を「須改換舊時往來之惡友、斷卻舊時顛狂之惡

習也」と解釈する。ここでは潘説に従って解釈する。

〔通釈〕

薄絹のとばりには埃がつもり(□□□□)、とばりのなかは(私ひ  
とりで)ひっそりしている。笙のふえの音もとりとめがなく、あ  
の人が放蕩して何年も経つのがうらめしい。鏡台の前で紅もおし

ろいもつけずに座っている。ただ香を焚いて天に祈るだけ。

真珠のような涙がぼろぼろとこぼれ(着ている服に落ちて)斑点となる。あなたが帰ってくるのを待って、謹んであなたにこう申し上げよう。「悪いお友達と付き合うのを改めて、狂ったように遊ぶ悪い癖を断ち切らないといけません。」

## 12. 010 竹枝子(其二)

又(一)

高捲朱簾垂玉牖。公子王孫女。顔容(二)二八小娘。滿頭珠翠影爭光。百步惟聞蘭麝香。

口合紅豆相思語。幾度遙相許。修書傳與蕭娘(三)。儻若有意嫁潘郎。休遣潘郎爭斷腸。

〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』(総編)卷一 雜曲 雲謠集雜曲子

「雲謠集雜曲子」第二詞第二首 S1441Vを原卷とする。

(一)又 S1441Vは「又」字がある。

(二)顔 S1441Vは「傾」と書写する。これについて、蔣禮鴻「校議」は、羅振玉『敦煌零拾』が「顔」と作るのを是とする。その根拠として、敦煌変文「八相變」「父母恩重經講經文」「父母恩重經講經文」などに「顔容」の語が用いられることを挙げる。ただ、現行の『敦煌零拾』(一九二四年東方學會排印《六經堪叢書》

本)は「傾」のママである。蔣禮鴻「校議」の拠るところの『敦煌零拾』はどのテキストなのか、不明である。ただ、総編・潘「新書」・『全唐五代名詞』はすべて「顔」に作る。

(三)娘 S1441Vは「郎」と書写する。『疆村遺書』本の朱孝臧の校語に「愚按「郎」疑「娘」誤。」とある。これに従って、総編・『全唐五代名詞』はともに「娘」に作る。

〔韻字〕

牖〔上44有〕・女〔上8語〕／娘〔下平10陽〕・光〔下平11唐〕・

香〔下平10陽〕

語〔上8語〕・許〔上8語〕／娘〔下平10陽〕・郎〔下平11唐〕・

腸〔下平10陽〕

—饒宗頤「敦煌曲韻譜」上去聲第五部／平聲第二部

冒廣生「新觀雲謠集雜曲子」(『冒鶴亭詞曲論文集』所収、上海

古籍出版社、一九九二年)は「牖」を「戸」〔上10姥〕に代え「女」

「語」「許」と通韻させる。

蔣禮鴻「《敦煌曲子詞集》校議」は、「牖」〔上44有〕↓流攝(

が「女」〔上8語〕↓遇攝)と協韻する根拠として、白居易「琵琶行」で「婦」〔上44有〕↓流攝)が遇攝の上聲韻とともに押韻

されている例を挙げ、冒のように「戸」に改める必要は無いとする。ただし、白居易「琵琶行」の通押問題について、鮑明煒「白居易元稹詩的韻系」(『鮑明煒語言學文集』九七頁、南京大學出版

社、二〇一〇年）は、流攝の唇音が遇攝と近かったから、として  
いる。「牖」は唇音ではない。鮑の説に従えば、蔣禮鴻が「牖」と  
「女」が協韻する根拠として白居易「琵琶行」を例にあげるの  
は適切でないことになる。

〔注〕○朱簾 朱色のすだれ。総編は「珠簾」に作る。『先秦漢魏  
晉南北朝詩』で検索すると、「朱簾」は二例、「珠簾」は六例と、  
後者の方が用例が多い。とくに『玉臺新詠』では四例ある。○

玉牖 宝玉で装飾されたまど。○王孫 王の子孫。また、貴族  
の後裔。○顔容 「容顏」に同じ。容貌。○珠翠 真珠と翡

翠。花間派詞人、薛昭蕴「離別難」に「半妝珠翠落、露華寒」  
とあるように、『花間集』の詞に多く用いられる。○蘭麝香 蘭

と麝の香り。西晋の石崇が、侍女たちには衣装に蘭と麝の香り  
を焚きしめさせた（『晉書』「石崇傳」）ことを出典とし、奢侈の

イメージを持つ。『玉臺新詠』の詩、『花間集』の詞に用いられ  
る。○紅豆 王維「相思」詩に詠われるように、「紅豆」は「相

思木」になる果実。「相思木」との関連から、「紅豆」で男女の  
愛情を象徴する。これも『玉臺新詠』の詩、『花間集』の詞に用

いられる。○蕭娘 梁の蕭宏を北軍が「蕭娘」と呼んだことか  
ら「蕭娘」で広く女子を指して言う。『南史』卷五十一「梁宗室

上・臨川靖惠王（蕭）宏傳」に「北軍歌曰、不畏蕭娘與呂姥、但  
畏合肥有韋武」。○潘郎 西晋の潘岳のこと。美男で知られた。

後世、美男の代名詞として使われた。○争 ほとんど（蔣禮鴻  
『敦煌文獻語言詞典』）。『漢語大詞典』は「掙」に同じとする。

〔通釈〕

珠のすだれは高く巻き上げられ、玉のまどに垂れ下がっている。  
公子王孫のむすめは、美しい容色で十六歳の少女。頭いっぱい  
真珠と翡翠が争うように光を放っている。百歩離れても蘭と麝香  
の香りがする。

口に紅豆を含む、それはあの人へ告げる言葉が実を結んだかの  
よう。遠く離れていながらも何度となく気持ちを許してきた。手  
紙をしたためて蕭娘に贈る。もし潘郎に嫁ぐ気持ちがあるならば、  
潘郎が（蕭娘を思って）はらわたもちぎればかりに苦しませて  
はいけない。

### 13. 011 洞仙歌

華燭光輝。深下幃幃（一）。恨征人久鎮邊夷。酒醒後多風醋。  
少年夫婦。向淥窗下左偎（二）右倚。擬鋪鴛被。把人尤泥。  
須索琵琶（三）重（四）理。曲中彈到、想夫怜處。轉相愛幾  
多恩（五）意。却再（六）敘衷（七）鴛衾枕、願長與今（八）  
宵相似。

## 〔校勘〕

『敦煌歌辞総編』（総編）巻一 雑曲 雲謡集雑曲子  
 『雲謡集雑曲子』第四詞第一首 S1441Vを原巻とする。

- (一) 幘幘 S1441Vは「幘幘」と書写する。
- (二) 左俛 S1441Vは「佐俛」と書写する。
- (三) 琵琶 S1441Vは「瑟琶」と書写する。「疆村遺書」龍榆生校本は「琵琶」に改める。
- (四) 重 S1441Vは「從」と書写する。「疆村遺書」況周頤校本は「重」に改める。
- (五) 恩 S1441Vは「思」と書写する。「疆村遺書」龍榆生校本は「恩」に改める。
- (六) 再敍 S1441Vは「在緒」と書写するが、況周頤は「再絮」、饒宗頤『敦煌曲』は「再敍」と釈読する。
- (七) 衷 S1441Vには「衷」の下に「克」あるいは「充」のよ

うな字が書写されている。あるいは「衷」を二度書写したようにも見える。饒宗頤は「衷曲」と釈読する。潘重規『新書』および林政儀「敦煌」〔云謡集〕對証は「衷□」の「□」は衍字と見なす。(六) (七) を含む句を、諸家は以下のように釈読する。

- ・ 却再絮充鴛衾枕。〔疆村遺書〕況周頤校本
- ・ 却再敍衷鴛衾裏。〔任半塘『敦煌曲校録』〕
- ・ 却再絮衷鴛衾枕。〔任半塘『総編』〕
- ・ 却再敍衷曲鴛衾枕。〔饒宗頤『敦煌曲』〕

- ・ 却再敍衷鴛衾枕。〔潘重規『新書』および林政儀「對証」〕
- ・ 却在緒衷克鴛衾枕。〔高國藩『敦煌曲子詞欣賞』〕
- (八) 今 S1441Vは「金」と書写する。

## 〔韻字〕

輝〔上平8微〕・幘〔上平8微〕・衷〔上平6脂〕・婿〔去12霽〕・倚〔上4紙〕・被〔上4紙〕・泥〔上平12齊〕・理〔上6止〕・處〔上8語〕・意〔去7志〕・似〔上6止〕  
 — 饒宗頤「敦煌曲韻譜」異部平仄通押者（ただし、「被」は韻字に入れない）。

## 〔解題〕

「洞仙歌」は『教坊記』「曲名」に載るが、その歌辞は敦煌の「雲謡集」にしか見られず、これ以外の唐五代の歌辞が全く伝えられていない。ただ、宋词では「洞仙歌」は多く作られる。

〔注〕 ○華燭 はなやかにともるともしび。 ○幘幘 008「竹枝子」参照。 ○邊衷 辺境の異民族。「邊衷」の語は『先秦漢魏晉南北朝詩』にも『全唐詩』にも見られないので、散文の語彙に属すると考えられる。 ○風醋 気のある素振り。なまめかしい姿。「風措」に同じ。 027「魚歌子」参照。 ○夫婿 夫。妻が夫を呼ぶときの呼称。「あなた」。古楽府「日出東南隅行」〔玉



臺新詠』卷二)に「……東方千餘騎、夫婿居上頭。……坐中數

千人、皆言夫婿殊」とあるなど、樂府詩の問答体に用いられる。

○淥窗 002「鳳歸雲」其二參照。○偎 寄りかかる。「倚」に

同じ。毛文錫「浣溪沙」に「晴日眠沙鴻鵠穩、暖相偎」とある

など『花間集』によく見られる。口語語彙であろうか。○鴛被

「鴛鴦被」に同じ。鴛鴦が刺繡され、一対になった被(かけぶと

ん)。夫婦がともにねる寝具。「鴛衾」「鴛鴦衾」。○尤泥「尤

は「まとわりつく(纏綿)・むつまじい(愛昵)」の意、「泥」は

「むつまじい(親昵)」の意から、「尤泥」は「尤帶」に同じく、

相手を恋い慕うことを表す。宋詞には、「尤紅帶翠」「尤花帶雪」

「尤雲帶雨」といった表現が見られる。なお、饒宗頤『敦煌曲』

は「尤」を「尢」と翻字し、「尢」は「枕」と解釈する。それに

対し、潘思規『新書』は饒説を否定する。○想夫怜 曲名。崔

令欽『教坊記』『曲名』にもその名がある。『樂府詩集』卷八○

「近代曲辭」二「相府蓮」の解題によると、「相府蓮」はもと南

齊・王儉の宰相府にあった池の蓮にちなんで作られた曲であり、

のちに「想夫憐」「簇拍相府蓮」などの名に変わったという。白

居易にも「聽歌六絶句」其四「想夫憐」がある。○却再敘衷鴛

衾枕 本訳注はこの句については潘重規『新書』の釈読に従う。

同書は「敘衷」を「談心(思いを述べる)」とし、この句を「謂

再敘衷懷於衾枕間也」と解釈する。なお「却」は「再び」の意

(蔣禮鴻『敦煌文獻語言詞典』)と考え「却再」で一語と解した。

〔通釈〕

華燭は光り輝き、とばりの中深くまで照らしだす。(女は言う)

「恨めしいのは、出征したあの人、長いこと辺境の異民族との戦

いに従っていること」と。女は酒の酔いから醒めると、なんとも

なまめかしい。「まだ年若いあなた！」(と女は呼びかけ)緑の羅

紗の窓のもと、右に寄りかかり、左にもたれる。鴛鴦の衾を敷こ

うとして、夫のことを思い焦がれる。

琵琶を探して再び音を整える。曲を奏でて弾じるのは、「想夫

憐」の曲。夫を愛する思いはますます強く、受けた愛情はどれほ

どか。もう一度、鴛鴦の衾のなかで思いを述べる。「どうかとし

えに今宵と同じでありますように」と。

#### 14. 012 洞仙歌(其二)

又(一)

悲雁隨陽。解引秋光。寒蛩響夜夜堪傷。淚珠串滴(二)、旋流

枕上。無計恨征人、爭向金風漂蕩。擣(三)衣暎(四)亮。

懶寄迴文先往。戰袍待纒、絮重更薰香。慙慙憑驛使追訪。願

四塞來朝明帝、令戎客(五)休施流浪。

〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』(総編)卷一 雜曲 雲謠集雜曲子

「雲謠集雜曲子」第四詞第二首 S1441Vを原卷とする。

(一) 又 S1441の原文は「又」字の後に「珠」があり、この「珠」の右には「卜」字が小さく書写されている。総編も潘重規『新書』もこの二字を削除する。

(二) 滴 S1441Vは「的」と書写する。

(三) 擣 S1441Vは「禱」と書写する。

(四) 瞭 S1441Vは「寮」と書写する。

(五) 纒 S1441Vは「穩」と書写する。饒宗頤『敦煌曲』は「纒」に改める。

〔韻字〕

陽〔下平10陽〕・光〔下平11唐〕・傷〔下平10陽〕・上〔上36養〕・蕩〔上37蕩〕・亮〔去41漾〕・往〔上36養〕・香〔下平10陽〕・訪〔去41漾〕・浪〔去42宕〕。

— 饒宗頤「敦煌曲韻譜」同部平仄通押者。

〔注〕 ○悲雁 悲しげに(痛ましげに) 飛ぶ雁。「悲雁」は『先秦漢魏晉南北朝詩』にも『全唐詩』にも用例は無く、この「雲謠集」の洞仙歌が最も古い用例。○隨陽 (雁が) 太陽に従って南へと飛ぶ。任半塘は『敦煌曲初探』「後記・考屑補・隨陽雁」において「唐人習用之辭」と述べる。○解 できる。「能」〔會〕に同じ。○寒蛩 晩秋に鳴くコオロギ。○寒蛩響夜夜堪傷 S1441には「夜、」と書写されており、これに関連して、

句読の方法に以下のように異説がある。「寒蛩響、夜夜堪傷。」(鄭振鐸校訂『世界文庫』・饒宗頤「敦煌曲」。ただし、饒宗頤『敦煌曲韻譜』同部平仄通押者)では「響」を押韻字に見做さない) ○旋 ついで。さまざま。潘重規『新書』は「隨即」に解し、「淚珠串滴、旋流枕上」の二句を「串串淚珠、隨即流墜枕上」と解釈する。○無計 どうしようもない。「無計奈何」に同じ。○争 「怎」に同じ。どうして、どうやって。○擣衣 砧の上に布をたたく。ここでは、そのときに女性が歌う歌声を指す。高國藩『敦煌曲子詞欣賞』は、明嘉靖年間の曲を収める『風宣玄品』(1939年)なかの琴曲「擣衣曲」が唐の潘庭堅の作であることを指摘して、「擣衣」を琴曲「擣衣曲」のこととするが、ここではとらない。○嘹亮 音声が明るく澄んでいるさま。『遼曉』「寥亮」に同じ。○迴文 回文詩のこと。『玉臺新詠』卷九の蘇伯玉妻「盤中詩」は、伯玉が遠方の蜀にあったとき、長安にいる妻が夫を思って作った。また、『晉書』卷九十六「列女傳・竇冶妻蘇氏」には、前秦の苻堅のころ、秦州刺史・竇滔は「流沙」の地に移され、妻の蘇若蘭は夫を思い、錦を織って迴文旋圖詩を作って夫に送った、との逸話がある。「迴文」または「錦字書」で妻が夫に手紙を送る典故として用いられる。○待 「大」と「待」は敦煌文献では通用する(蔣禮鴻『敦煌文獻語言詞典』)。○纒 『廣韻』上聲十九隱に「纒 縫衣相著」(衣を縫い合わせる)とある。蔣禮鴻「校議」はさらに『本事

詩』の開元宮女の詩「蓄意多添綫、含情更著綿」を引き、この「洞仙歌」の「縹絮」は「著綿」（綿衣を縫う）の意だとする。この説は任半塘『總編』・潘重規『新書』に支持される。ただ、蔣禮鴻は「戰袍待縹絮、重更薰香」と句読する。○重 ①平聲。重ねて（蔣禮鴻「校議」）。②去聲。重い（潘重規『新書』）。ここでは②を採る。○四塞 四方の藩屏の国。『禮記・明堂位』を典とする。○令戎客 S141Vは「令戎客」と書写するが、羅振玉『敦煌零拾』は「令夫婿」に作り、『疆村遺書』朱孝臧校本および冒廣生「新輯『云謠集雜曲子』」は「令我客」に作る。任半塘の総編および蔣禮鴻「校議」は「令戎客」に作る。「戎客」は、故郷を離れ辺境の地を防備する兵士の意で、ここではこの歌辞の女主人公の夫を指す。これに対して、潘重規『新書』は「令戎客」のままよいとする。「戎客」は四夷の異民族を指す。○休施 蔣禮鴻「校議」は「休施」沒有意義、「施」は「把」字的錯誤、而「把」又是「罷」的同音通借字。……「休罷流浪」就是不再流浪。」と述べる。蔣禮鴻「校議」は、「令戎客」では「戎客」を「戎客」に作り、「令戎客休罷流浪」で「出征したあなたが、これ以上流浪することがないように」と解釈する。総編は蔣説を否定する。潘重規『新書』は「不施猶言不用、施、用也。」と述べる。ここでは、「令戎客」・「休施」とも潘説に従い解釈する。

〔通釈〕

痛ましげな雁は、太陽に従って南へと向かい、秋の光とともに飛ぶ。晩秋のコオロギは夜に声を響かせ悲しみに堪えている。涙の粒は串刺しされて一粒一粒たたたって、そのまま枕の上へと流れてゆく。出征して帰らぬあの人を恨んでもどうしようもない、いったいどのように秋風に吹かれながら辺境の地を転々としているのだろうか。砧の上に布をたたきながら歌う歌声は明るく澄んでいる。

寶滔の妻、蘇若蘭のように回文詩を遠く離れたあの人に送るのも物憂い。いくさに行ったあの人のために長く大きな綿衣を縫い合わせると、綿は重く、重ねて香を焚きしめる。これをあの人に届けて欲しいと、馭使に丁寧頼み込む。どうか、四方の藩屏から使者が来朝して明君に拝謁しますように、（そして）四夷の異民族にこれ以上さまよって入寇させないようにしてほしいのです。

〔付記〕

本稿はJSPS科研費・基盤研究(B)「東アジア古代歌謡の文学的・音楽学的アプローチによる双方的研究」(研究代表者・長谷部剛、21H00509)による成果である。

# Translations and notes of Dunhuang Quzici Ⅲ

HASEBE Tsuyoshi

*Yun yao ji* 雲謠集 is a collection of Dun huang qu zi ci 敦煌曲子詞, containing 30 poems. Dun huang qu zi ci 敦煌曲子詞 is undoubtedly a preceding form of Song ci 宋詞, a research on it has not being actively pursued in the Japanese academic world. HASEBE, Tsuyoshi translated and annotated 4 poems in *Yun yao ji* 雲謠集 in cooperation. This is the first stage of study on Dun huang qu zi ci 敦煌曲子詞.

キーワード：雲謠集 (*Yun yao ji*), 敦煌曲子詞 (Dunhung Quzici), 宋詞 (Songci)